

花森安治と戦後民主主義の文化政治

葛西 弘隆

これは あなたの手帖です
いろいろなことが ここには書きつけてある
この中の どれか 一つ二つは すぐ今日 あなたの暮しに役立ち
せめて どれか もう一つ二つは すぐには役に立たないように見えても
やがて こころの底にふかく沈んで
いつか あなたの暮らし方を変えてしまう
そんなふうな
これは あなたの手帖です¹

1. はじめに

花森安治(1911-1978)は、1948年に雑誌『暮らしの手帖』を創刊した個性的な編集者、そしてデザイナー、ジャーナリストとして知られている。『暮らしの手帖』は長年にわたり多くの読者を獲得し、戦後世代のなかには、この雑誌とともに育ち、生活に必要な知識や技術を『暮らしの手帖』から学んだと自認するひとが少なくない。その社会的影響において、雑誌とともに花森安治は戦後日本思想史における興味深い存在といえる。

近年、暮らしの手帖社が『暮らしの手帖』の歴史と花森の紹介に力を入れるようになり、花森をテーマにした別冊を出し、生誕100周年を記念する美術展が企画・開催されたりした。また、2016年にはNHKの朝の連続テレビ小説「とと姉ちゃん」のモデルとして花森がとりあげられたことも記憶に新しい。この間、花森を直接知る関係者の証言や記録、そして評伝などの刊行をつうじて、花森の経歴について明らかになってきたことも少なくない。しかし、その知名度に反比例してというべきか、人文社会科学的な視点から一貫した見

1 『暮らしの手帖』創刊号、表紙裏、1948年9月。

通して花森安治を論じた研究はけっして多いとはいえない²。

本稿では、編集者、デザイナー、ジャーナリストなど多面的な顔をもつこの「奇人」のテキストを民主主義思想の視座から読んでみることにしたい。彼の書き残したものを読むと、その多様な関心の対象と多岐にわたる活動の基底に、戦時期から戦後を経験した文化人としての、民主主義への一貫した関心があることがみえてくる。そうした関心から、本稿ではとくに次の点に留意して論じる。1) 花森安治のテキストを戦後日本の政治思想の理論的コンテキストで読む。2) 彼が提起した「暮し」の概念を日常性の文化政治という観点から評価する。3) 大政翼賛会に関わった戦時期の活動と『暮しの手帖』に代表される戦後の活動との連続性に留意する。4) 1970年前後に花森がとくに関心を寄せた戦争、国家、公害という主題の連関を明らかにし、この時代を「プレ2011年」の時代として理解する可能性を提起する。

花森の「暮し」の概念構制は、おそらくは彼自身の意図をこえて、今日の民主主義思想と文化政治をめぐる理論と実践に少なからぬヒントと課題を与えてくれるように思われる。花森の主要なテキストのいくつかをたどりながら、彼の思考を補助線として、ポスト3.11の時代の文化政治への理論的・歴史的視座を開くための予備考察になることを期待している。

2. 軍隊、宣伝、政治——花森の戦時期

花森安治は1911年、神戸に生まれた。文化的モダニズムが開花した時代に国際的な港湾都市神戸で育った花森は、幼少時から映画館に入り浸り、宝塚歌劇に親しみ、中学生の頃には図書館で平塚らいてうを読み耽っていたという³。島根県の(旧制)松江高等学校に進み、校友会雑誌の編集を判型やデ

2 一般書をふくめ以下参照。桜井哲夫『増補 可能性としての「戦後」——日本人は廃墟からどのように「自由」を追求したか』(平凡社ライブラリー、2007年、原著、講談社、1994年)、天野正子『「生活者」とはだれか——自律的市民像の系譜』(中公新書、1996年)、鹿野政直『日本の近代思想』(岩波新書、2002年)、秋山洋子『「暮しの手帖」を読みなおす——花森安治と松田道雄の女性解放』、加納実紀代責任編集『リブという「革命」——近代の闇をひらく』(インパクト出版会、2003年)、佐藤千寿子『花森安治——その時、何を着ていたか?』、栗原彬、吉見俊哉編『敗戦と占領——1940年代』、『ひとびとの精神史』第1巻(岩波書店、2015年)。図録『花森安治の仕事——デザインする手、編集長の眼』(読売新聞社・美術館連絡協議会、2017年)、『文藝別冊 花森安治——美しい「暮し」の創始者』(河出書房新社、2011年)、大橋鎮子『「暮しの手帖」とわたし』(暮しの手帖社、2010年)、酒井寛『花森安治の仕事』(暮しの手帖社、2011年)、津野海太郎『花森安治伝』(講談社、2013年)。

ザインまでひとりで担うようになり、編集者・デザイナーとしての歩みがはじまった。高校卒業後、東京帝国大学文学部美学美術史学科に入学した。在学中は学生新聞『帝国大学新聞』での活動を中心に過ごし、日本がファシズムと戦争に入っていく時期の学生ジャーナリズムに携わった⁴。

1937年に卒業論文「衣粧の美学的考察」を提出して卒業すると、化粧品メーカーの伊東胡蝶園（のちのパピリオ）に入社して広告デザインの仕事を始めた。日中戦争勃発によりまもなく徴兵され、満洲とソ連の国境地帯の警備を担当する部隊の歩兵となる。帝大卒業生は通常は士官候補生となるが、花森は在学中に一度も軍事教練に出なかったため、歩兵として徴兵されたという⁵。神戸でのモダニズム経験とともに、この軍隊経験が花森の思想、とりわけ彼の政治観・国家観におおきな影響を与えたことはまちがいない。1年半後、結核を患い部隊を離れ内地に戻る。和歌山県の陸軍病院で療養した後、1940年に除隊となり、伊東胡蝶園に復職した。1941年からは大政翼賛会宣伝部で戦時動員のための宣伝政策に携わり、国策プロパガンダの専門家として戦意高揚キャンペーンのフレーズ・デザイン制作を担当した。花森の作成したものとして、「お願いします、あの旗を射たせてくださいッ」などの標語が知られている。

大衆宣伝・プロパガンダの専門家として働いたこの時期に花森が残した文章はすくないものの、高校から大学まで新聞の制作や編集にかかわり、卒業後は広告業界に身を置いた花森が、「政治と宣伝技術」と題されたエッセイのなかで、戦時国家における広告宣伝の政治的役割について記した一節は目を引く。

家を建てるときには、設計をする人と、大工さんが要る。大工さんばかりで、設計する人がいない、それが、いまの「宣伝」である。……家を建

3 花森におけるジェンダーと「女性性」の問題は興味深い重要なテーマである。稿をあらためて論じたい。

4 当時の編集部には田宮虎彦、扇谷正造、杉浦民平らがいた。1930年代の学問と表現、言論の自由において大きな転点となった1933年の京都帝国大学の滝川事件、1935年の美濃部達吉の天皇機関説事件を、花森は学生ジャーナリズムの一角から経験した。戦前および戦時中の花森については以下参照。馬場マコト『戦争と広告』（白水社、2010年）、同『花森安治の青春』（白水社、2011年）。

5 「ぼくは、軍事教練に反対して出席しなかったから、将校になる資格はなかった。帰ってきたとき、上等兵であった」。花森安治「国をまもるといふこと」第2世紀2号、1969年9月、106頁。

てる人が、政治をする人だとしたら、宣伝をする人は、設計する人でなければならない。……政治をする人は、「宣伝技術」を知らなければならない。宣伝をする人は、「政治」を知らなければならない。「宣伝技術」を知っている、政治をする人、政治を知っている、宣伝をする人、その人こそ、「宣伝技術家」である。……「宣伝」を「宣伝美術」から解き放すことが大切である⁶。

花森は旧来の「宣伝美術」のありかたを批判しつつ、宣伝に携わる者にたいして政治社会的なビジョンをもち国家の「設計」に携わることを求める。国策宣伝、より具体的には言葉とデザインというミクロなアート(美/技術)の領域が、政治社会の「設計」であること、すなわち宣伝技術それ自体が政治であるということ、花森は確実に捉えていた。それだけでなく、この政治を自ら担っているという自負も見え隠れしている。近代思想史の歴史的文脈でいえば、言語とデザイン、宣伝の連携が近代的主体(国民・帝国臣民)を制作し、国民政治へと動員する主体的技術の重要な要素であるという認識は、明らかに1930年代のものであった⁷。主体的技術とは、人びとの集合的同一性を特定の仕方でも制度化し組織する一連の社会的装置を意味する。思想家で社会批評でも活躍した三木清は、1937年に次のように述べていた。「宣伝の意義と必要とを理解するためには、最も基本的には、自分を社会においているもの、世界においているものとして把握することが必要である。かような社会乃至世界の感覚或いは意識なしには宣伝は理解されない。しかもここでは大衆というものの重要性がつけに理解されていなければならぬ。固有の意味における宣伝とは政治的存在としての国体が一方自己自身に対し他方その政治的環境に対して自己保存乃至主張のために行う社会統制の一つである」⁸。花森はまさにこの宣伝をつうじた社会統制の現場にいた。彼は国策プロパガンダの実践をとおして、総力戦下における帝国臣民の動員＝〈人を動

6 花森安治「政治と宣伝技術」、『花森安治集——いくさ・台所・まつりごと篇』(LLP ブックエント、2013年)、93-94頁(初出は『宣伝』1942年5月号)。

7 大衆宣伝と国民的動員については以下参照。佐藤卓己『大衆宣伝の神話——マルクスからヒトラーへのメディア史』(弘文堂、1992年)、佐藤卓己、馬場マコト「花森安治の書かなかったこと」、『考える人』2011年夏号(新潮社)。戦時期日本思想における主体的技術の問題については下記参照。酒井直樹『日本思想という問題——翻訳と主体』(岩波書店、1997年)。

8 三木清「新宣伝論」、『三木清全集』第15巻(岩波書店、1967年)、218頁。この時期の花森が関わっていた報道技術研究会のメンバーをつうじて、三木清が文化部門で中心的な役割を果たした昭和研究会との人脈的・理論的連関の可能性を付記しておく。

かす)テクノロジーの先端に立ち、その使命を自覚しつつ探求していたことがわかる。

3. 思想としての「暮し」——日常性と政治

1945年5月、戦局が悪化するなか大政翼賛会は解散し、8月に東京で敗戦を迎える。『日本読書新聞』のカット絵を書いていたところに、友人の紹介で同社で働く若い女性、大橋鎮子に出会う。大橋は女性のための雑誌をつくることを目指していた。花森は彼女のつよく明確な意志に共感し、1946年、銀座に衣装研究所を設立する。そして2年後、社名を暮しの手帖社と変更し、大橋を発行人として『美しい暮しの手帖』(のちに『暮しの手帖』と改題)を創刊する。花森は以後、生涯をとおしてこの雑誌の編集長として働くことになる。彼は企画と運営全般に辣腕をふるう編集者であるだけでなく、自らデザイナー、イラストレーターとして多くの作業をこなし、さらに多くの記事やエッセイを自ら書いて雑誌の性格やイメージを方向づける、マルチな才能を発揮するジャーナリストであった。事実、『暮しの手帖』は、とりあげる題材からページデザインにいたるまで、花森の意志をつよく反映していた。

『暮しの手帖』の読者で、表紙を開くと目に留まる次の文章を知らないものはいないだろう。「これは あなたの手帖です いろいろなことが ここには書きつけてある この中の どれか 一つ二つは すぐ今日 あなたの暮しに役立ち せめて どれか もう一つ二つは すぐには役に立たないように見えても やがて こころの底にふかく沈んで いつか あなたの暮し方を変えてしまう そんなふうな これは あなたの手帖です」⁹。平易な言葉でつづられたこの文章は、いわば『暮しの手帖』のマニフェストとして、1948年の創刊号から現在にいたるまで、すべての号の巻頭に掲げられている。この短文は、『暮しの手帖』が掲げる精神、すなわち花森が「暮し」とよぶ思想——さしあたり日常生活の文化政治と規定しておこう——の基本的な設計図であり、読者への宣言である。その中心には、人びとが日々の営みをつうじて合理的精神を生み出すという課題があった。

9 『暮しの手帖』創刊号、表紙裏、1948年9月。『暮しの手帖』に掲載された花森の文章には、改行を多用する、句読点を用いない、フレーズとフレーズの間に全角スペースを入れるなど、独特のレイアウトが用いられているものが多い。読みやすさを優先し、改行をつなげ、全角スペースを削除するなど適宜変更を施していることを付言する。

この маниフェストが読者への〈よびかけ〉になっていることに注意しておきたい。この雑誌の読者は、記事を読み、たんに生活上の個別の実利的便益を得るだけでない。読む行為をつうじて読者自らの生活態度や思想が変わっていく可能性が、ここには示唆されている。この宣言文は、あたかも暗示、あるいはルイ・アルチュセールのイデオロギー国家装置における主体の審問——〈よびかけ〉のように、読者自身の内面性の作用をつうじて雑誌の理念に〈自発的〉に参加することを促すような仕方で発話されている。この雑誌を彼は「手帖」と名づけた。『暮しの手帖』は、書き手から読み手への一方的な情報伝達ではなく、ノートブックや日記のように読者自身が書き込み、修正し、記録していく、すなわち自らが自らの暮らしを設計する主体となるために、読者自身の〈主体的〉参与を引き起こすように言葉が配置されているのである(事実、『暮しの手帖』は読者からの投稿を重視する誌面づくりを旨とした)。その意味において、花森にとっての『暮しの手帖』は、戦時中の〈宣伝技術者〉の論理を異なる目的に応用したものと理解することができる。この宣言は、戦時期的花森が論じていた意味における「設計」の戦後における表現でもあった。戦時の帝国臣民から戦後の民主主義的主体へと、政治的 목적は異なっても、実のところ、道具立てには戦時期的宣伝技術からの連続性があったといえる。

婦人雑誌として出発した『暮しの手帖』は、女性だけでなく男性読者も意識していた¹⁰。人びとの日常生活にかかわるテーマをはばひろくとりあげ、花森がもともと専門としていた服飾はもちろんのこと、料理、インテリアや住まい、家庭と仕事(とくに女性の生きかた)、健康と医療、音楽、旅、そして日常生活の知恵など多岐にわたる話題を扱った。なかでも日々の生活に役立つ実用的な工夫や技術、考えかたを紹介することに力点が置かれていた。著名な文学者・文化人によるエッセイも掲載した。また、身近にあるものを上手に利用して自分でつくったり工夫したりすることを重視していた点では、後にDIY(Do it Yourself)として知られることになる思想を先取りしていたといえる。なかでも、料理には毎号多くのページを割いた。料理の重視は、食への好奇心が旺盛な花森自身の興味を反映していたとしても、たんなる個人的嗜好によるものではなかった。むしろ彼は、食べることがもつ政治

10 たとえば以下の広告からも男性読者への意識を伺うことができる。「これは婦人雑誌ですが、少しでも明るく暮すためにゼヒ男のひとにも読んで一緒に考えて頂きたいのです」、「第7号中吊り広告」、1950年4月、『花森安治の仕事』、80頁。

的役割と意味をきわめてたかく評価していたのである。

花森は、しばしば「みそ汁と内閣」、「民主主義と味噌汁」というレトリックを用いた。これらふたつの語の奇妙な組み合わせには、食べることから政治社会編制まで串刺しにしてひとつの問題として捉えようとする、花森の〈暮し〉概念の特徴が端的にあらわれている。彼はいう。「一つの内閣を変えるよりも、一つの家のみそ汁の作り方を変えることの方が、ずっとむずかしいにちがいない」¹¹。その理由は、「内閣は投票で倒すことができるけれど、ある家庭の味噌汁の作り方は、当人たちがまずいと感じていても、変わらない」からである。花森にとって、料理と食事は習慣化された思考行動様式によって固定され、政治社会の実定的諸制度にもまして変革は容易でないと映っていた。しかし同時に、食べることと無関係に生きることは誰にもできない。だからこそ、社会変革は食べることのような日常生活の具体性からこそ始めなければならない。花森はこう考えた。「料理というものは趣味、娯楽でやるものではないのです。朝昼晩、日々の生活を維持するためのものです。大根とヒジキと油揚げの煮付といった、どこの家庭でも食べる日常的なものをすこしでもうまく作る、そのほうが、一見シャレた料理をカラーでのせるより、はるかに暮しにプラスする、とぼくらは考えています。こうして、一つずつみかさねていけば、やがては暮しを変えていくことになりはしないか」¹²。

ひとが何を食べるか？ いかに食べるか？ 花森にとって食べることは生きることであり、それは人間として生きるかぎり、つねにすでに政治的实践だった。食は日常生活をつうじて権力がミクロに展開する場であり、したがって権力に介入する可能性も準備するものであり、究極的には、政治を声高に語らずとも社会を変革する可能性につながるものとして理解されていた。そのような意図を背後にふくみつつ、花森はプロの著名な料理人を招き、和洋中の料理の基本から手の込んだもてなし料理にいたるまで、さまざまなレシピを次々と記事にしていった。記述はあくまで実用性を重視し、レシピを読んだ編集部のスタッフが料理を同じようにつくりことができるかどうかを基準としていた。事実、テレビの料理番組や、まして21世紀の今日のようなウエ

11 花森安治「風俗の手帖——みそ汁と内閣」、「暮しの手帖」9号、140頁。「内閣は、三日や一週間なくても、別にそのために国が減びることもない。……ところが、暮しの方は、そうはゆかない。たとえ一日でも、暮すのをやめるわけにはゆかないのである。……機械でいうと、歯車なら歯車、鋏なら鋏一本とりかえんとして、機械の運転を止めないで、やってみろ、と言われていたようなものだと思う」（同前、140-141頁）。

12 花森安治「民主主義と味噌汁」、「中央公論」1965年9月号、115頁。

ブ上のレシピサイトなど存在しない時代にあって、多くの人びとが定期購読した『暮らしの手帖』を頼りに新たな料理を覚えていった。こうして『暮らしの手帖』は、花森の狙いどおり、読者にとって日常生活という政治の現場における指南書の役割をはたすことになる。

では、文化と政治をつなぐ、より正確に言えば文化が広義の政治であるというこの視座は、花森自身の経験との関連で、どのようにして形成されたのだろうか。後年の回想のなかで、敗戦当時、東京の街をあてもなく歩いていたときに目にしたフライパンの輝きに言及している。

戦争が終わった後、町を歩くと、露店がダーッと出はじめてきましたね。そこで真っ先に出てきたのは、フライパンです。フライパンが出てきたときなんか、どんなにほくら気持ちが明るくなったか。……いままで台所に入ったことのない男のほくらが見ても、フライパンがこんなにあるというのは、実に心豊かなことでした。そうして、ほくは、ここで、ここじゃないかと思ったんです。台所だ。台所をとにかく北向きからいちばん日の当たるところへ置いたらどうだろう。そこはなんといっても一家の中心で、生活の中心だというようなことがだんだんほくの中でハッキリしてきて、つまり暮らしというものが一番大事だ、これをほんとうに、理屈でなくて、腹の底までわかりあおうじゃないか……¹³。

後年の回想であることに留保があるものの、要点は明確である。戦時中の耐乏生活のように、なにかと暗く否定的なイメージで捉えられていた日常生活＝「暮らし」を、人びとが自らのコミットメントをつうじて明るく積極的なものへと変えていく必要性を花森は痛感した。フライパンはその象徴であり、なによりまず台所と料理こそが介入すべきポイントだった。「腹の底」には二重の意味がこめられている。腹は空腹を満たすとともに、思想を身体化するアリーナと考えられていた。

戦争を起こそうというものが出てきたときに、それはいやだ、反対するというには反対する側を守るに足るものがなくちゃいっかんじゃない

13 「僕らにとって8月15日とは何であったか」、「一億人の昭和史4 空襲・敗戦・引揚」1975年9月号、毎日出版社。以下の再録より引用。『花森安治集 いくさ・台所・まつりごと篇』（LLPブックエンド、2013年）、218-9頁。

か。……天皇上御一人とか、神国だとか、大和民族だとか、そういうことにすがって生きる以外になかないか。ぼくら一人一人の暮らし、これはどうか。暮らしというものをもっとみんなが大事にしたら、その暮らしを破壊するものに対しては戦うんじゃないか。つまりは反対するんじゃないかと¹⁴。

花森は、人びとが自らの〈暮し〉をないがしろにしていたことが、戦争をとめられなかった原因だと考えた。衣食住の重視はたんに生活の近代化や合理化をめぐる主題ではなく、戦争への批判、社会科学的に言えばファシズム批判の重要な一部をなしていた。

もっとも、敗戦直後の日本において、市井の人びとの日常生活がもちうる政治的・社会的重要性を指摘することは、なにも花森の独創ではなかった。戦争とファシズムを「悔恨」(丸山眞男)する当時の社会的雰囲気の中かで、日本の知識人・文学者たちの言論には、国家に回収されない〈個人性〉や〈自我〉の確立、前政治的なものとしての〈私的なもの〉の称揚、理論以前(とされた)感性や欲求の解放と全面的肯定の議論があふれていた¹⁵。女性と政治の関わりについては、戦前から婦人参政権運動に取り組んでいた奥むめおが政治と台所をキーワードを掲げ、参議院議員となった。生活の具体性のメタファーとしての台所と政治の関係については、たとえば政治思想家の丸山眞男によっても言及されている。花森の発想の特徴を理解するために、簡単におくことにしよう。

1946年、丸山は女性団体の会合で「政治と台所の直結について——それは何であり、又それが何でないか」と題する講演を行った。「政治と台所の直結」という表現の流行は、「政治が我々の日常生活と密接な関連を持って来たという〈傾向〉を表示すると同時に、政治は迂遠な空論に耽るべきではなく日常生活の切実な欲求を満たすべきであるという主張をも包含している」¹⁶。その必然性を認めただうえで、丸山は、むしろそうした認識の危険性にも注意

14 同前。

15 J. Victor Koschmann, *Revolution and Subjectivity in Postwar Japan* (University of Chicago Press, 1996). [J. ヴィクター・コシュマン『戦後日本の民主主義革命と主体性』拙訳(平凡社、2011年)]. とくに第2章を参照。

16 丸山「政治と台所の直結について——それが何であるか、又それが何でないか」、『女性新聞』1946年7月20-21日、『丸山眞男集』第16巻(岩波書店、2004年)、375-8頁。『女性新聞』は日本基督教女子青年会(日本YWCA)の発行である。1946年の普通選挙法改正による女性の参政権「獲得」と、女性の国民的主体化への関心の結びつきがうかがえる。

をうながす。「政治が台所と結びつくという事は、政治が個々の台所の要求を直接に、個別的に満足させるという意味ではないという事です。政治は人民の問題をつねに全体として解決しようとしています」。したがって、民主主義においては自己の私的利益の充足をこえて抽象的な「政治の全体性」という水準をよく理解しなければならない。ジャン・ジャック・ルソーの一般意志と全体意志の概念に言及しつつ、彼は聴衆にたいして「治者の気構えをもつ」ことを要求する。「民主政治は人民が国家の主人であるところの政治形態です。いいかえれば人民の一人一人が治者としての気構えと責任を持つところに、民主主義の本質がある筈です。治者としての気構えを持つということは、更に言いかえれば、政治の全体性、総合性をつねに見失わない事です」。政治の全体性とは、もちろん主権国家を構成すべき国民の主体の全体性のことである。丸山の主張は、帝国崩壊後の政治的主体を再定義し、新たな〈国民〉をつくりだすために、福沢諭吉にならって、人びとが自発的に国家を内面化するよう促すことにあった。その意味で、丸山にとって日常性の問題は、基本的に〈私的なもの〉から区別された〈公的なもの〉に自発的に参加する国民を創出することに役立つものとして評価されていたといえる¹⁷。

いっぽう花森は、丸山とは対照的に、あくまで日常生活の具体性にこだわりつづける。花森は物事を〈きれい〉に説明する学説、イデオロギーなどの抽象概念を信じていない。議論をいくらか単純化していえば、彼はあえて〈私的なもの〉の水準にこだわり、そこにある政治的なポテンシャルを掘り起こそうとする。花森はしばしば「守るに足る暮し」という語を用いた。彼は、この言葉が戦後の労働基準法に示されているという。1947年に施行された労働基準法の第一章「総則」第一条は、「労働条件は、労働者が人たるに値する生活を営むための必要を充たすべきものでなければならない」と謳う。花森の「守るに足る暮し」とは、この「人たるに値する生活」という理念のことをさしている。人間としての尊厳をもった生活と解釈してよいだろう¹⁸。

17 丸山眞男の民主主義観については以下の拙論を参照されたい。葛西弘隆「丸山眞男の『日本』」、酒井直樹・ブレット・ド・バリエ・伊豫谷登土翁編『ナショナリティの脱構築』（柏書房、1996年）、205-229頁。葛西弘隆「ナショナル・デモクラシーと主体性——丸山眞男の民主主義論再考」、『思想』（岩波書店）1999年2月号、64-92頁。

18 『暮しの手帖』100号（1969年）の冒頭に掲載された「なんにもなかったあの頃——暮しの手帖を通して見た戦後の三年間」で、花森は創刊当初の社会状況と『暮しの手帖』の取り組みを振り返った。そのなかに以下の言及がある。「〈人タルニ値スル生活〉〈人間らしく生きる〉にはどうしたらよいか、いってみれば、暮しの手帖ははじめてこの問いに取り組んでそれなりに苦しんできたようにおもう」（11-12頁）。

ここで彼が「暮しを守る」ではなく、「守るに足る暮し」と言っていることは重要である。いっけん同じような表現でありながら、それらが意味するところは異なる。「暮しを守る」といえば既存の生活を維持、保存することを意味するのにたいして、「守るに足る暮し」の〈暮し〉では、既存のものではなく、人びと自身の手によって生み出すべきものという点が強調されている。「守るに足る暮し」は〈いまここ〉にあるのではなく、〈自らの力で作くりあげる〉ことが要求されているのである。つまり、花森の〈暮し〉概念は、さきにもた「あなたの暮し方を変えてしまう そんなふうな これは あなたの手帖です」のレトリックがそうであるように、未来への〈賭け〉、つまり読者自身の投企を求めるものとして提示されている。ただし、戦後初期、『暮しの手帖』創刊当初の花森は「守るに足る暮し」がいったい〈何から〉暮しを守るのかについて、まだ明示的には語っていない。

ところで、人びとの日常生活における社会的実践を重視し、思想にまで高めようとする花森の文化政治の設計図は、1930年代の戸坂潤の議論を思い起こさせるものでもある。マルクス主義思想家の戸坂潤はこの時期、科学の大衆性、風俗、常識といった問題について精力的に論じていた。日常性の概念もそのひとつである。戸坂潤は、1930年代のマルクス主義の理論的文脈、そして日常性を人間の本来性からの頹落と定義したハイデガーを批判する文脈で、次のように述べた。

吾々は毎日一定の社会に於て一定の生活条件の下に、感受し反省し計画し実行するというサイクルを反復している。これが日常生活で、この日常生活の持っている根本特色以外に日常性の哲学的基礎はあり得ない筈だろう。コンベンションや歴史の「必然性」などにそのまま追随しては日常生活など実はやって行ける筈はないのであって、日常生活はいつもコンベンションを破り新しい必然性を造り出して行くことによるのみ事実保たれている¹⁹。

『近代による超克』で1920-30年代の文化モダニズム論を分析したハリー・ハルトゥーニアンは、この戸坂の日常生活観について、「日常生活とは、人々

19 戸坂潤「日常性について」1934年9月、『思想としての文学』1936年2月、『戸坂潤全集』第4巻、136-7頁。戸坂の日常性概念の重要性を論じたものとして以下参照。Harry Harootyan, *Overcome by Modernity* (Princeton University Press, 2002). [ハリー・ハルトゥーニアン『近代による超克』上下、梅森直之訳（岩波書店、2007年）]。

がそこにみずからを見いだす実践的・物質的な環境の『場面』のことにほかなら」と要約する²⁰。日常性とは、マルティン・ハイデガーが考えたような本来性からの「頹落」などではなく、それ自体、社会編制において構成的にはたらくダイナミックな要因である。ハルトゥーニアンが指摘するように、戸坂は日常性が同時に実践性でもあることを強調した。日常生活のなかでの「批判的な実践のみが、堆積した因襲の桎梏をくつがえし、新しい習慣を思い描くことを可能とする」のである。

1930年代の戸坂が理論家として扱ったモダニズムと日常性の問題を、その時代環境に育った花森は戦後に、学問的語彙によってでなく、料理や日常生活のような、あくまで具体的な技術の水準で扱ったと考えることができる。日常生活という領野をつうじて新しい社会的現実をつくりだすという課題に取り組んでいたのである。このように、花森の「暮し」概念は、すでにいまある生活様式の護持のことではなく、また、生活をスムーズにするたんなる小手先の工夫に尽きるものでもなく、「生きること」そのもののありかたを方向づけるような、日常性の政治思想とでもよぶべき概念装置であった²¹。

花森は、そうした暮しの思想の核心には合理的精神があるべきだと強調する。「じぶんの目で判断することが、ぼくらが生活して行くときのいちばんの基本である。だから生活するということは、メシを食う、寝るということから、いかなる仕事や思想を持ち、どんな社会であってほしいということまでを含めて、自分の目で判断すること、これが合理的精神です」²²。食えること、着ることをはじめとして、花森にとって暮しとは、それをつうじて自らが練成されていく、社会的に開かれたアリーナであった。「戦争をくりかえさぬためには、生活のなかで物を買うにしても、使うにしても、筋道をたてる習慣をつけようではないか」²³。そして、合理的な判断力は政治社会秩序に自発的にかかわるうえで不可欠の能力でもある。「ぼくは進歩派、保守派、前向き、後向きというレッテルを貼るやり方はいやです。ひとつひとつ自分の目で判断する——これが民主主義につながるでしょう。それにはまず具体的な日常生活から始めなければならない」²⁴。花森にとって民主主義と

20 ハリー・ハルトゥーニアン『近代による超克』上、254頁。

21 戦後日本思想史の日常性をめぐる古典的な見取り図については以下参照。高島通敏編『日常の思想』、『戦後日本思想体系』14（筑摩書房、1970年）。ただし同書は花森をとりあげていない。

22 花森「民主主義と味噌汁」、110頁。

23 同前、110頁。

24 同前。

は、既存の権威を疑い、自らの力でものを考え、生きていくことができる能力によってはじめて可能となるはずのものであった。その意味で『暮らしの手帖』は情報の一方的な伝達ではなく、読者が民主主義を支える合理的精神を獲得し、自ら実践することに主眼がおかれていた。『暮らしの手帖』が読者からの手紙、投稿を重視したのもこのためであった。読者にとっては、まさに暮らしの練習帖 (A Notebook of Everyday Life) でなければならなかったのである。花森自身は合理主義のような抽象用語やイデオロギーが嫌いだと述べるものの、彼の政治戦略が日常生活における規律をつうじた合理性の拡大にあったと解釈することは、あながち間違いではないだろう。この意味において花森はまぎれもなく戦後日本の啓蒙思想家だった。

4. 商品テスト

『美しい暮らしの手帖』は1953年に発行された第22号で題名を『暮らしの手帖』に変更し、翌年、新たに「商品テスト」という企画を開始する。このシリーズはおおきな反響をよび、以後長年にわたり『暮らしの手帖』のトレードマークとなった。テストの対象には、米、醤油、石けん、タオル、電球といった日々の生活必需品をはじめ、当時一般家庭にひろがりつつあった石油ストーブ、炊飯器、洗濯機、掃除機、冷凍食品、冷蔵庫、エアコンのような、生活を便利にする新たな機器や家電製品が選ばれた。彼らは研究所とよぶ編集部のおフィスを舞台に、しばしば長い期間と労力をかけて詳細な試験と調査を行った。テストの方法自体、編集部で議論しながら試行錯誤を繰り返し、ひとつひとつの製品について、使用者の視点から長所、耐久性、欠陥、改善を要する点などを具体的に指摘した²⁵。

1969年4月の『暮らしの手帖』100号には、花森の「商品テスト入門」が掲載された。この長編のエッセイは、すでに十数年にわたるこの企画の趣旨を再確認するとともに、その背後にある問題意識について雄弁に語っており、花森の思想を知るうえでとくに興味ぶかい。商品テストがユーザー、すなわち

25 たとえば電気ジャーをテストした記事の見出しには次のようにある。「アツアツかなにか知らぬが、なんだって昨日の朝たい飯を、けさ食わされねばならないんだ、第一、この飯のひどさ メーカーは果して食べてみたのだろうか」。そして結論部分では次のように記される。「この種の電気仕かけのジャーは、消費者としては、謹んでノシをつけて返上申し上げる、あまり暮らしというものをなめなさんな」。「あたたかいばかりが能ではない——いわゆる電気ジャーをテストする」、『暮らしの手帖』第2世紀10号、1971年、62、65頁。

消費者の目線から行われていること、読者がそれを知っていることをふまえたうえで花森は、読者を挑発するかのように、エッセイの冒頭で「商品テストは消費者のためにあるのではない」と断言する²⁶。今日、「すぎまじい商品の洪水の中で、私たちが溺れかけようとしている」。しかしそこで、消費者運動がするように、ただ「かしこい消費者」になることを勧めても意味はないと花森は考えた。むしろ、「メーカーが、役にも立たない品、要りもしない品、すぐ壊れる品、毒になる品を作らなければ、そういうものを問屋や小売店が、デパートやスーパーマーケットが、売りさえしなければ、それで事はすむ」。「商品テストは、じつは、生産者のためのものである。生産者に、いいものだけを作ってもらうための、もっとも有効な方法なのである」²⁷。ここには、どこまでも具体的に、暮らしを構成するモノ＝商品のありかたへの介入をつうじて社会的変革の可能性を切り開こうとする花森の考えかたが、はっきりと現われている。この企画は、消費者個々人の賢さや選好の問題としてではなく、現代の資本主義経済へのミクロな介入として企画されていた。

『暮らしの手帖』は広告を一切とらないことで知られている。それにはふたつの理由があった。ひとつは、「編集者として、表紙から裏表紙まで全部の頁を、じぶんの手の中に握っていたいから」という誌面デザイン上の理由がある。数々のベストセラーの装釘を手がける職人的デザイナーでもある花森は、職人として周到に設計し配置した意図を台無しにしてしまう文字や意味内容が自分の雑誌に入り込むことを嫌った。もうひとつは、より本質的なこととして、なによりも広告をつうじた外部からの干渉や(不)可視の社会的圧力の可能性から自由であるかぎりにおいてはじめて、メディアは自分たちが本当に書きたいことを書きたいように語り、書くことができるという要因がある。すでにみたように戦時中、花森は大政翼賛会の宣伝部に籍を置き、戦時動員のための大衆宣伝に携わっていた。戦後の花森はその経験から、文化メディアとしての自律性を保つためには、いかなる種類の宣伝も排除すべきであるという信念をもつようになっていた。「広告をのせることで、スポンサーの圧力がかかる、それは絶対に困る……〈商品テスト〉は絶対にヒモつきであってはならない」²⁸。このことは、花森にとって、ジャーナリズム

26 「商品テスト入門」、『暮らしの手帖』100号(1969年4月)、86頁。花森『一銭五厘の旗』(暮らしの手帖社、1971年)に再録。なお『暮らしの手帖』は100号を1世紀と数え、次号から第2世紀1号と数える。

27 同前、87頁。

28 同前、88頁。

がジャーナリズムであるために決定的に重要だった。商品テストの担当者がメーカーに問い合わせたりやりとりしたり訪問したりする際には、弁当を持参させ、先方から接待されて「コネ」がつかないようにするほど、花森は『暮らしの手帖』の自律性に細心の注意をはらった。

商品テストは個別の製品についてのレビューから構成されていたが、そこには、『暮らしの手帖』が自らに課した社会的役割が投影されていた。それは、批評をつうじて既存の権威を相対化することである。花森は言う。「商品テストは、もちろん商品の批評にはちがいないが、その判断の基礎には、暮らしに対しての深い目と時代の動きについてのひろい考えがなければならない。ある意味では〈商品テスト〉は、商品の批評であると同時に、社会批評であり、文明批評でもなければならない」²⁹。その効果を最大限発揮する設計図と実行可能な基礎を、花森は時間をかけて周到につくりあげていった。

広告をとらない『暮らしの手帖』の自立を可能にしたのは、読者による定期購読である。創刊以来一貫して、『暮らしの手帖』は定期購読者の獲得とその拡大に努めた。発行部数を見てみると、1948年の創刊号は1万部、第二号は1万2000部、第三号は1万5000部と伸びていき、商品テスト導入後の1958年には30万部、1964年には80万部に達した。1960年代中頃までに『暮らしの手帖』は、こうして狭義の婦人雑誌・女性誌のカテゴリーには収まらない、戦後日本でもっともひろく読まれる文化誌のひとつになっていた。花森自身、商品テスト企画の開始は発行部数の増加による社会的影響力を考慮に入れたものであったことを認めている³⁰。事実、彼らの商品テストの評価が製品の売り上げに響くといわれるようになり、それを気にしたメーカーから陽に影にクレームや脅迫、裏工作がもちかけられたという。彼は、商品テストに求められる資格として、勇気を強調する。「いかなる権力にも、いかなる圧力にも、いかなる金力にも屈しないで、正しいと思ったことをやりとげる、それには、いささかの勇気が要するというわけである。そのいささかの勇気を、いつも持ちつづけていたい、しみじみおもうのである」³¹。

29 同前、90頁。

30 「商品批評をやるにしても、雑誌に力がなくては意味がない。……同人雑誌のようなものがいくらか商品テストをやったところ、大企業には痛くもカユクもないわけで……部数が増せばチクリとやることもできるだろうと考えた」、花森「民主主義と味噌汁」、111頁。

31 「商品テスト入門」、90頁。「民主主義と味噌汁」でも次のように述べている。「ぼくは、権威に対してのチェックが民間にない社会は不健全な社会であると常に考えています。ソ連であろうと、中共であろうと、民間にチェックの機関をもたなければ、長い間には社会がまずいことになる。だから民間に批評というものがなければいけない。ぼくはそれを商品批評という形で始めているが、その他の点でもこの姿勢は崩すまいと思っている」（花森「民主主義と味噌汁」、111頁）。

『暮らしの手帖』は、創刊当初、表面上は狭義の政治から区別された意味における「文化」雑誌のカテゴリーで出発した。彼は、日常生活こそが政治の現場であることを十分に認識したうえで、きわめて意図的かつ戦略的に、人びとの日常生活に焦点を絞った誌面づくりをおこない、まず雑誌のカラーをつくりあげた。彼は戦時中の経験から、宣伝の「効果」——宣伝がいかにかにひとを動員しうるか——を当事者として経験すると同時に、生活に根づかない抽象的な理論や思想がいかにもろいものであるかも学んだ。彼が「暮らし」と名づける文化的な領野は、実定的な法や諸制度に直接かかわる狭義の政治をこえて、人びとの意識や行動様式をつうじて〈政治的に〉構成されるものである。そのこと、つまり文化政治の重要性を、花森はまさしく宣伝技術者としてよく理解していた。日常性から出発して、合理的精神、批判的思考と行動力を練成すること。これが花森の設計図であり戦略であった。

よりひろい文脈では、戦争とそれを支えた思想への反省が基礎にある点において、彼はいわゆる戦後民主主義思想の世界観を共有していた。花森はそのプロジェクトに、戦時中の戦争動員に用いた宣伝技術を応用し、今度は一般に「文化」とよばれる領野を切り口に、合理的で批判精神をそなえた「近代的主体性」の制作に携わることにふかくコミットしていた。花森は、自ら主導権を握ることができる自前の雑誌をおもな舞台として、戦後民主主義の文化政治のために宣伝技術を駆使した。ただしその手法は、次第に社会批判、そして文明批評としての性格をつよめていくことになる。

5. 戦争、「くに」、国家

このような、狭義の政治（たとえば国政）の位相を強調せずに民主主義的主体性の構築をはかる『暮らしの手帖』の編集方針は、しかしながら、1960年代中頃から変化していく。戦争と国家、公害、食品添加物、テレビ番組、広告の氾濫、交通問題といった政治社会問題を扱う記事が目につくようになり、花森自身がしばしば長文のエッセイを寄せて読者に問いかけるようになる。

「戦争中の暮らしの記録」と題された1968年8月の『暮らしの手帖』第96号は、この新たな傾向を象徴的に示している。この企画のために、事前の告知で読者から戦争中の経験についての手記を募集したところ、編集部予想をはるかに上回る、数千通の手紙が編集部に届いたという。この号のすべての誌面は、一般読者からのそうした回想と、花森が書いたエッセイにより構成された。「あとがき」は次のように述べる。「この号は、一冊全部を、戦争中の暮らし

の記録だけで特集した。一つの号を、一つのテーマだけで埋める、ということは、暮しの手帖としては、創刊以来はじめてのことだが、私たちとしては、どうしても、こうせずにはいられなかったし、またそれだけの価値がある、とおもっている。……編集者として、お願いしたいことがある。この号だけは、なんとか保存して下さい、この後の世代のためにのこしていただきたい³²。花森は、『暮しの手帖』が築きあげてきた読者との対話論的な関係をいかし、戦争体験と記憶の多様なありかたを読者自身の言葉をつうじて可視化しようと試みた。

事実、「戦争中の暮しの記録」はおおきな反響をよんだ。多様な内容をふくみつつも、戦時中の経験と記憶を集めることで花森が照らし出そうとした主要な論点のひとつは、近代国民国家の根源的な暴力性を明らかにすることにあつたと思われる。たとえば、この特集のために花森が書いた「戦場」というエッセイをみてみよう。太平洋戦争末期の空襲、おそらくは東京大空襲を念頭に、花森は、戦場という言葉の理解を問いなおす。空襲で被災した市街は〈焼け跡〉とよばれ、生き残ったものは〈罹災者〉とよばれた。しかし、じつは〈焼け跡〉になった市街は実際には戦場にほかならず、空襲で命を落とした多くの非戦闘員は〈戦死者〉ではないのかと、花森は問いかける。

〈戦場〉は いつでも 海の向うにあった 海の向うの ずっととおい
 手のとどかないところにあった学校で習った地図を ひろげてみても
 心のなかの〈戦場〉は いつでも それよりもっととおくの 海の向うに
 あつた……地上 そこは 〈戦場〉では なかった この すさまじい焼
 夷弾攻撃にさらされている この瞬間も おそらく ここが これが〈戦
 場〉だとは だれひとり おもっていなかった……爆弾は 恐しいが
 焼夷弾は こわくないと 教えられていた 焼夷弾はたたけば消える
 必ず消せ と教えられていた みんな その通りにした 気がついたと
 きは 逃げみちは なかった まわり全部が 千度をこえる高熱の焔で
 あつた しかも だれひとり いま 〈戦場〉で 死んでゆくのだ とは
 おもわないで 死んでいった……ここが みんなの町が 〈戦場〉だつ
 た こここそ 今度の戦争で もっとも凄惨激烈な 〈戦場〉だつた³³

32 花森安治「あとがき」、『暮しの手帖』96号（特集『戦争中の暮しの記録』）、1968年、250頁。翌年、増補のうえ単行本として出版された（暮しの手帖編『保存版 戦争中の暮しの記録』（暮しの手帖社、1969年））。

33 花森安治「戦場」、『暮しの手帖』96号、6-14頁。

現代史や戦争論で論じられてきたように、20世紀の二度にわたる世界大戦では、とくに科学・化学の急速な発展にともない、戦争のありかたそのものがおおきく変容した。前線と銃後の区別が溶解し、古典的な戦争では戦場ではなかった都市が戦場となり、戦闘員ではない市民の死者数が戦闘員をはるかに上回った。兵士として前線に立ち、また戦時動員のプロパガンダに従事した花森は、このことを理解していたにちがいない。しかしそれだけでなく、花森はここで同時に、人びとが自ら戦場で〈戦死〉していくとは考えなかったことの意味を問うている。淡々とした筆致で綴られていくこのエッセイからは、人びとが受け入れていた解釈枠組み（花森自身がその宣伝に携わっていた）が、じつは国家の本質から人びとの眼をそらす煙幕、(レ)トリックだったのではないかという論点が浮かびあがってくる。戦争の悲惨さや非合理性にもまして、近代国家がイデオロギー教育をつうじて人びとを死へと駆りたてていった仕組みそのものに焦点が当てられているのである³⁴。こうした疑問が、政治とはなにか、近代国家とはなにかという問いへと展開することは必然だろう。こうして60年代末以降の花森は、はっきりと〈くに〉を問うようになる。もちろん彼自身の戦時中の経験がおおきな役割をはたした。この頃から花森は、国家にたいしてほとんど恨みとっていいほどのつよい感情を隠さなくなる。

たとえば、1969年のエッセイ、「〈くに〉をまもるということ」では、国家への忠誠を問い、次のように記した。

ためしに、ここで誰かが「なぜ〈くに〉を守らねばならないのか」と質問したら、はたしてなん人が、これに明確に答えることができるだろうか。ぼくのことをいうと、小さいときから、なんとなく、〈くに〉は守らなければならないもの、とおもいこまされていた。なぜ守らなければならないのか、先生も親も、だれも教えてくれなかったが、〈くに〉を守るということは、まるで、太陽が朝になるとのぼってくるように、わかりきった、当然のことだった³⁵。

34 ことばをめぐるこうした政治的トリックは、戦時中のこの例に限られるものではない。2011年以降の日本での「風評被害」や「絆」といった語の社会的用法も、物理現象を個人心理の次元に転位する点で、同じような社会的機能を果たしていると読むことができる。「焼夷弾はたたけば消える」は「除染」を想起させるだろう。戦争と生をめぐる解釈枠組みについての現代の理論的考察として、以下参照。Judith Butler, *Frames of War: When is Life Grievable?* (Verso, 2010). [ジュディス・バトラー『戦争の枠組——生はいつ嘆きうるものであるのか』清水晶子訳（筑摩書房、2012年）]。

35 花森安治「〈くに〉をまもるということ」、『暮らしの手帖』第2世紀2号、1969年、105頁。

敗戦は、それまではあまりに自明のものだった自己と〈くに〉との関係に、はじめて疑問をもつきっかけとなった。「戦争に敗けて、なにもかも様子が変わってしまった。……ふと、〈なぜ、くにというものを、愛さなければならないのか。なぜ守らなければならないのか〉という疑問がおこってきた。答えられなかった」。同じことを、別の機会にはさらにつよい表現で述べる。「生まれた国は、教えられたとおり、身も心も焼きつくして、愛しぬいた末に、みごとに裏切られた。もう金輪際こんな国を愛することは、やめた」³⁶。興味ぶかいことに、花森はここで〈ほく〉と〈くに〉の関係を、貸し借りの収支、つまり契約の論理によって理解しようとする。

ほくと日本という〈くに〉の、これまでのつきあい方をおもいかえしてみ、いったい、〈くに〉からほくが借りているのか、ほくが〈くに〉に貸しているのか、賃借対照表をかんたんにつくり上げてみよう。……こんどの戦争では、ずいぶん多くの国民が〈くに〉に貸した筈である。……この人たちに、〈くに〉は、まだ、なんにもかえしていない。……ここで〈くに〉というのは、具体的にいうと、政府であり、国会である。〈くに〉に、政府や国会にいいたい。〈くに〉を守らせたために、どれだけ国民をひどい目にあわせたかを、それを、忘れないでほしい。……いまの世の中を、これからの世の中を、〈くに〉が、ほくたちのためになにかしてくれているという実感をもてるような、そんな政治や行政をやってほしい、ということである。それがなければ、なんのために〈くに〉を愛さなければならないのか、なんのために〈くに〉を守らなければならないのか、なんのために、ほくたちは、じぶんや愛するものの生命まで犠牲にしなければならないのか、それに答えることはできない筈である³⁷。

こうした解釈の背後に、戦時中に自分自身も騙されていたという「被害者」の論理をみいだすことはむずかしくない。また、花森の発想から戦争および帝国の植民地支配をめぐる歴史的責任の問題が抜け落ちてしまう傾向についても、忘れずに指摘しておかねばならない。「日本人であること」の資格をめぐる問いは、花森からは出てこない。そもそも花森は、被害者どころか、戦

36 花森「わが思索わが風土」、『朝日新聞』1972年6月17日。花森の国家批判は自ら内面化した愛国心の裏返しでもあることを指摘しておくべきだろう。

37 花森「〈くに〉をまもるといふこと」、『暮しの手帖』第2世紀2号、1969年、106-7頁。

時動員の政策遂行に関与する立場にあったのである。しかしながら、そのことを確認したうえでなお、花森が問う概念的な筋道が、見事なまでに近代政治思想における社会契約の論理にしたがっていることは、あらためて興味ぶかい。花森は、政治共同体(国家)とその成員(国民)の存在を自明のもの、アプリアリのものとしては考えていない。彼の発想の根底には、近代の自由主義的な社会契約論の発想がはっきりとみとれる。よく知られるように、17世紀にジョン・ロックは、政府という組織が自らの生命と財産(property)をよりよく守るために同意によってつくられる人為的なものであるとする解釈を理論化した³⁸。社会契約論は、政治社会秩序の生成を歴史の事実性によってではなく、自然権という過剰命題によって理論化するものだった。政府はあくまで人民の信託にもとづくかぎりにおいて正統性をもつのであって、しかも、もしその政府が人民の生命と財産を脅かすような場合には、人民には政府に抵抗しこれを改廃する権利があることも論じていた。

ことばづかいこそ異なるものの、花森が問うているのは、政治共同体はあくまで暮しに役立つかぎりにおいて認められるものであるにもかかわらず、戦時の大日本帝国は人びとの生命を守らなかったことにある。つまり、戦時期日本の政府は政府としての正統性を欠いていた、つまり国家として失格だといっている。彼は、戦争の経験と記憶を掘り起こすことをつうじて、このような国家の作為性、道具性、そして既成秩序の背後にある無根拠性もしくは暴力性を確認しようとしている。一人称で語られる「ぼく」にとって、国家のために死ぬことなど割にあわない取引だといっているわけである³⁹。

では、なぜこの時期になって正面から国家の役割が論じられることになったのだろうか。端的に言えば、1960年代後半以降の花森が、現代の国家に戦時との同質性を見いだしたことがおおきな要因であったと考えられる。戦争はたしかに人びとの生活と生を破壊した。自分たちのなかに、それに抵抗するだけの基礎もなかった。だから敗戦後、彼は生きる条件を構築するために〈暮し〉という思想を掲げた。雑誌は多くの読者を獲得し、そのプロジェクトは成功を取めているといつてよかった。しかし1950年代後半からの高度経済成長のなかで、国家＝政府は人びとの生活を顧みることなどせ

38 ジョン・ロック『統治二論』完訳、加藤節訳(岩波文庫、2010年)。

39 花森は近代の「開拓地」に関心を寄せ、しばしば北海道の近代史と合州国の西部開拓をエッセイの題材にとりあげた。詳細な検討については以下の拙稿を参照されたい。葛西弘隆「花森安治と北海道——開拓・棄民・国家」、『国際関係学研究』第44号(津田塾大学、2018年)。

ず、にもかかわらず人びとは自力で「守るに足る」暮しを築くどころか、自らの生を現代資本主義の論理に明け渡すようになった。こうした状況認識のもと、花森安治の闘い——彼が信じる自律した個人の確立のための——は終わらなかつた。終わっていないどころか、状況は悪化し、戦略は行き詰まっていた。花森安治は1960年代末までに、〈暮し〉の思想が彼の期待するような方向には進まなかつたことを認めざるをえなくなる。彼は現在進行形の問題を言語化するためにこそ、あらためて国家や戦争という主題に正面から向き合わざるをえなくなった。つまり同時代に介入するうえでの参照点として、戦時期の経験と記憶があらためてクローズアップされることになったのである。言いかえるなら、戦時期と戦後を〈重ねて〉考えるようになったともいえる。そして彼は、1945年の敗戦により〈戦争〉が終わったのではなく、異なるかたちで継続していることを認めた。終わっていないその戦争とは、国家／政府および資本主義との／による戦争である。一言でいえば、この時期までに花森は彼の「戦後」がいまひとつの「敗戦」を迎えつつあるという感覚をもっていた。つまり問題は過去に固有のものというより、目の前にあった。その意味で、花森にとって戦争の記憶と記録に注目することは、〈いまここ〉を問題化するための不可欠の回路だったのである。それはたとえば、以下のような文章にもはっきり現れている。

どうしてもけじめをつけてもらわなければならないのは〈政治〉である。いったい政治は、だれのためにやっているのか。昨今これぐらい、うじゃじゃけているものはないだろう。……政党や政治に、けじめがなくなったときが、独裁者のいちばん生まれやすいときである。独裁者は、どこの国でも、いつでも、国民に歓呼されて、登場してくる。……野暮なことはいいこなし、おかたいことはごめんだ、そういうふうが、世の中に、次第にみちてきつつある。政治のあり方を見て、腹も立たず、しかたがないと、うすら笑みをうかべ、ばかげたテレビ番組に、うつつをぬかし、野暮なことはいいこなし、で暮しているうちに、やがて、どういう世の中がやってくるか⁴⁰。

こうして花森は、同時代としての「戦後」への批判を強めていく。そこに現われる花森の姿は、もはや風俗について軽妙に批評し、服飾や住まいについ

40 花森安治「もののけじめ」、『暮しの手帖』第2世紀1号、1969年7月、142-3頁。

て職人的に語る文化批評家でも、日常生活の合理性をミクロに探究する雑誌編集者でもなく、国民国家の欺瞞と現代資本主義の横暴に憤り、現代が直面する根本的な危機を文明論を視野に入れて抉り出そうとする、ひとりの怒れる思想家の姿であった。

6. 「ぼくら」の民主主義

花森は、1960年代中頃以降に歴史、政治、現代消費社会などを主題に『暮らしの手帖』に発表したエッセイを集めて、1971年に単行本『一銭五厘の旗』を出版した⁴¹。すでに言及した「商品テスト入門」や「戦場」もこのなかに収められている。『一銭五厘の旗』という書名は、『暮らしの手帖』第2世紀8号(1970年)に掲載されたエッセイ、「見よぼくら一銭五厘の旗」からとられたものである。戦争中の召集令状に貼られた切手の値段が一銭五厘(実際はもっと安かった)で、軍隊では「貴様らの代りは一銭五厘で来る」と言われて、兵士は馬より低い扱いを受けていた。「ぼくらの命や 暮らしなど 国にとっては どうでもよかったのだ」。戦後になって「民主主義の〈民〉はぼくらのことだと教えられた」。しかし「それをうれしがつて うじゃじゃけているあいだに 二五年もたつて 気がついたら また ぼくら 一銭五厘になりかかっている」⁴²。一銭五厘なみの扱いは過ぎ去った昔のものではなく、いままた自分たちに起こっているのではないかと問う。その批判の矛先は大企業と政府である。

一証券会社が 倒産しそうになったとき 政府は 全力を上げて これを救済した ひとりの家族が マンション会社にだまされたとき 政府は眉一つ動かさない しかし 証券会社は救わねばならぬが 一人が どうなろうとかわまない という式の考え方では 公害問題を処理できるはずはない 公害をつきつめてゆくと 証券会社どころではない 倒してならない大企業ばかりだからだ その大企業をどうするのだ ぼくらは 権利ばかり主張して なすべき義務を果さない 戦後のわるい風習だ とおっしゃる (まったくだ) しかし 戦前も はるか明治のは

41 花森安治『一銭五厘の旗』(暮らしの手帖社、1971年)。同書のあとがきで花森は、取材で訪れた冬の京都で心筋梗塞を起こしたことがこの単著をまとめる直接の契機になったと記している。

42 花森安治「見よぼくら一銭五厘の旗」、『暮らしの手帖』第2世紀8号、1970年、5頁。

じめから 戦後のいまも 必要以上に 横車を押してでも 権利を主張しつづけ その反面 なすべき義務を怠りっぱなしで来たのは 大企業と 歴代の政府ではないのか……⁴³

花森は大企業を「秃鷹のような商人」とよび、資本の利益を代弁して人びとの生活に見向きもしない政府とあわせて痛烈に批判する⁴⁴。しかし、問題は政府と企業だけにあるのではなかった。戦後民主主義のもとで合理的精神や知的勇気が育まれるはずの人びとの意識には、面倒ごとを避ける事なかれ主義、コンフォーミズムが巢食っていた。花森はそれを「心に住みついたチョンマゲ野郎」とよぶ。変わらなければならないのは政府と大企業だけではない。「ほくら」自身も戦後の「幻覚の時代」から決別しなくてはならない。「ほくら」の暮しを守るために、主権者としての地位と意志を再構築しなくてはならない。花森は民主主義の語を前面に掲げ、その再構築を情熱的な筆致で訴えかける。

さて ほくらは もう一度 倉庫や 物置きや 机の引出しの隅からおしまげられたり ねじれたりして 錆びついている〈民主々義〉を探しだしてきて 錆びをおとし 部品を集め しっかり 組みたてる 民主々義の〈民〉は 庶民の民だ ほくらの暮しを なによりも第一にする ということだ ほくらの暮しと 企業の利益とが ぶつかったら 企業を倒す ということだ ほくらの暮しと 政府の考え方が ぶつかったら 政府を倒す ということだ それが ほんとうの〈民主々義〉だ 今度また ほくらが うじゃじゃけて 見ているだけだったら 七十年代も また〈幻覚の時代〉になってしまう そうなったら 今度はどう おしまいだ ほくら こんどは後へひかない⁴⁵

花森は、読者に自分の不満や要求を当時7円のはがきを書いて政府に送りつけようとしてよびかけ、ジョン・ロックの抵抗権の概念にしたがうように、企業と政府への抵抗と打倒を訴える。彼はまた「一銭五厘」の言葉を逆手にとつ

43 同前、17-19 頁。

44 花森安治「秃鷹のような商人」、『暮らしの手帖』第2世紀11号、1971年。

45 花森「見よほくら一銭五厘の旗」18-19頁。花森は、庶民の抵抗、とくに女性が中心的な担い手となった社会変革の例として、1918年の米騒動にしばしば言及する。

て継ぎ接ぎのボロ布を仕立てて、「こじき旗」、「暮しの旗」、「世界ではじめてのぼくら庶民の旗」と称した。この旗は単行本の表紙を飾り、長年にわたり暮しの手帖社の研究室に掲げられたという。この「見よぼくら一銭五厘の旗」が、とても直接的で力強いよびかけであることはまちがいない。くわえてこの時期に花森は、日本国憲法（とくに第九条）と非武装、反戦についても民主主義の観点からはっきりと擁護した⁴⁶。単行本『一銭五厘の旗』は評判となり、論壇で賞もとった⁴⁷。

すでにふれたいくつかのエッセイもふくめて、1970年代にかけて、花森の社会批判には政治経済への直接的な言及が増えると同時に、根幹にある「暮し」の概念そのものもおおきく変化しつつあったことに注意を払っておきたい。もっとも重要なポイントは、おそらく、政府・大企業と「ぼくら」という二項対立の図式にかかわっている。『暮しの手帖』創刊当時の「暮し」概念は、それ自体をつうじて自己が社会的に構成されていくような、動態的な性格のつよい概念だった。構成主義的といってもよいだろう。ところが1970年前後の花森の議論では、暮しは現にいまあるものへと横滑りしつつあり、政府と企業に抵抗する「根拠地」としての役割を担う傾向が強くなっている。その結果、政府・大企業対「ぼくら」という二項対立には、社会における対立を可視化するつよいメッセージ効果があるいっぽうで、集团的主体の実体化の傾向が見え隠れするようになった。結果として、花森のエッセイに「ぼくら」や庶民という語があふれるにつれ、皮肉にも暮しの概念が潜在的にもっていた文化政治のダイナミズムの要素は後景に退いていき、政治経済社会問題の切り口は次第に硬直的になり、ペシミスティックな論調が目立つようになる。

1974年、オイルショックのさなかに花森が書いた「買いおきのすすめ」になると、その傾向はさらに顕著になる。彼は国難にたいして「民難」という語を対置する。社会秩序の制作と変革に積極的に参加して政治共同体を自らのものにするのではなく、逆に国家から距離をとることを強調するようになる。「〈国をまもる〉とか〈国益〉とかいいます、そのときの〈国〉という言葉には、ぼくらの暮しやいのちはふくまれていないはずです。……ぼくらを助けたり、まもったりしてくれるものなど、どこにもありはしないのです。……ぼくらは、どんなことをしても、じぶんの暮しは、じぶんでまもるのです。これ以

46 花森安治「武器を捨てよう」、『暮しの手帖』97号。

47 1971年に第23回読売文学賞随筆紀行賞を、1972年にはアジアでの社会貢献の功績によりマガサイサイ賞を受賞した。

上妨害しないでください」⁴⁸。ここでの花森の態度は、かつての「守るに足る暮し」をつくるという主張とは異なり、「暮し」の領野を、政治経済の荒波から防衛すべき安全地帯としてなんとか確保することへと移行している。文化政治の戦略という点では明らかに退却戦を余儀なくされていた。悲痛な叫びのなかから現実政治への絶望が前景化していくなか、ロッキード事件で田中角栄前首相が逮捕された1976年には、衆議院選挙を前にして、ついに「僕はもう投票しない」とまで宣言するにいたる⁴⁹。

7. 公害——暮しといのち

この時期の花森は、政府を批判するとともに大企業の営利主義とそれが引き起こす公害、環境問題にも関心をよせ、批判的な問題提起を行った。戦争と公害といういっけん別個の問題は、花森のなかで、政治や経済がひとの生活といのちをどう扱うかという問いをつうじてつながっていた。どちらも、政治は誰のためのものかという問いを惹起する。1967年の「この大きな公害」には、公害についての花森の見方が明確に提示されている。花森の公害の定義は独特で、一般的な理解よりはるかにひろい。「天災という言葉がある。人災という言葉がある。人災とは、そのつもりになってさえいれば防ぐことのできた禍である。公害といいかえてもよい。大気汚染、交通事故、台風豪雨の被害、どれも大きな公害である。大きすぎるくらい大きな公害である」⁵⁰。社会的につくりだされた生活への脅威はすべて公害とよぶことができる。そしてここでも花森は、とくにひとが飲食するものに注目している。

人間は太古から、なにかを食べて生きてきた。気の遠くなるような人間のながい歴史のなかで、いま、きょう、その食べる物に、はじめて、な

48 花森安治「買いおきのすすめ」、『暮しの手帖』第2世紀28号、1974年、111-2頁。

49 花森安治「僕はもう投票しない」、『暮しの手帖』第2世紀44号、1976年10月。「政治家が大企業や大組合や大圧力団体のために動くのは、動くとかネが入るからである。……わざわざ投票所へ出かけて行って、口先はともかく、腹の底では、ほくらのことなど、虫けらほどにも考えていない人たちのために、民主主義的に、ちゃんとえらばれた、という見せかけを作り上げるダシになることはないのである。……ほくは、もう、投票しない。棄権するのではない、ストライキをするのである。投票用紙に、堂々と×を書くのである」(59頁)。ここで直面する問いは、「ほくら」とは誰なのか、人びとは政府・大企業対「ほくら」という排他的な二項対立の図式で捉えられるような仕方では生きていくのだろうかという問題である。1970年代の花森の「絶望」については機会をあらためて論じたい。

にか異常なことが起りはじめています。いままでこの体に入ったことのない物質がどんどん体の中に入りはじめています。その物質が、体の中で、どんな作用をするのか誰も知らない。……だれも知らず、なんにもわからないままに、私たちはそれを食べている。はっきりいえば食べさせられている。……じぶんの体もそのために毎日蝕まれているのではないかという、この恐ろしい疑いと不安。これは今私たち全部にのしかかっている、ある意味でもっとも大きな公害である。これをこのままにしておくことはできない。……本気になれば必ず防ぐことのできるものなのだ⁵¹。

黄変米、砒素ミルク、水俣病、サリドマイド、人工着色料、人工甘味料、農薬という七つの公害の経緯をひとつひとつ検証し、その危険性と制度的な無策を明らかにすることをとおして、花森は「人間の生命を軽く考える風潮」が今日の社会にひろがっていることをつよく憂慮する。「過去いくつかのこの種の事件を通して私たちが見たのは、政府の無力であり、企業優先の姿勢であった。ゼニの力はそれほど重く、人の命はそれほど軽いのであろうか」。国家の政策も、大企業中心の経済システムも、食生活をつうじて人びとの生活を破壊しつつある。そして花森は読者にむかって最後に問いかける。「人間尊重の考えは、ついに日本では育たないのであろうか」⁵²。

現実政治への評価においてそうであったように、花森の同時代観はここでもペシミスティックな度合いを強めていく。「地球が汚れ腐ってゆく、その速度をできるだけおそくするのが、たぶん、これからぼくらのできる精いっぱいギリギリのところだとおもう。ということは、ぼくらの子供や孫たちの地球は、いまより決してよくなることはない、ということである。ぼくらは、もう未来について、バラ色の夢をもつことはできない」と断言するようになる⁵³。

公害をとりあげるなかで、1970年代の花森は、かつての「暮し」概念——それは未来への投企の内包する日常生活の実践性であった——よりも、むしろ生命（いのち）の問題であることを前面に押し出すようになる。日常生活

50 花森安治「この大きな公害」、『暮しの手帖』91号、1967年、7頁。

51 同前。

52 同前、15頁。

53 花森安治「未来は灰色だから——こどもたちに　いま親たちがしてやらねばならないこと」、『暮しの手帖』第2世紀21号、1972年、19頁。

としての暮らしからのちへ、people's everyday life から physical life への転回である。そしてこの変化は、より根源的に地球環境への憂慮として表現される。1972年のエッセイ、「君もお前も聞いてくれ」は、読者に次のように問いかけかかす。「問題を三つ出す。問題ごとに、その答えを出した人に、それぞれ一兆億円を差し上げよう、というのである。問題の一つは、ガンを完全に治すクスリを、見つけて下さい、ということ。問題の二は、汚れた大気や海や川や湖の水を、もと通りのきれいな空気や水にする方法なり装置を、見つけてほしい、ということ。問題の三は、ぼくらの体の中に、こんなことっているあいだにも、じわじわとたまってゆく放射能とか、いろんな有害な物質を、どうしたら、それを無害なものにかえられるか、それを徹底的に解決して下さい」⁵⁴。1960年代後半以降の知的世界において、現代資本主義の〈経済成長〉が人間社会の基盤そのものを掘り崩しつつあるという認識は、日本国内のみならず、世界的にも議論されるようになっていた⁵⁵。「いま、ここで、ぼくが見本として出した問題は、国の中とか外とかの問題ではないのだ。〈地球〉のことだ。ぼくらの、この地球が、いま急速に崩壊してゆこうとしているという。……おそらく、君たちは、世界中がこんなことをしていたら、地球といっしょに、亡んでゆくかもしれないのだ。その日に、立ち会わなければならないのだ」⁵⁶。この一節は、花森がそれまで強調していた日常生活としての「暮らし」everyday life を超えて（もしくは深めて）、〈いのち〉の問題として、いいかえると人間社会とその物理的基礎としての地球にかかわる深刻な問題として論じていることをよく示している。戦後初期の「暮らし」概念がもっていた可塑性と未来に開かれた明るさが、ここではまったく失われていることに気づくだろう。

1978年1月、花森安治は66歳で亡くなり、同月刊行の第2世紀52号が彼の編集した最後の『暮らしの手帖』となった。花森の死後、雑誌『暮らしの手帖』はすこしずつその姿を変えながら、現在も刊行をつづけている⁵⁷。花森と二人

54 花森安治「君もおまえも聞いてくれ」、『文藝春秋』1972年3月号。ここでの引用は下記の再録より。『文藝別冊 花森安治——美しい「暮らし」の創始者』（河出書房新社、2011年）、11-12頁。

55 1971年には環境庁が設置された。また、1972年にはローマ・クラブの『成長の限界』が出版され、世界的に論争を引き起こした。ドネラ・H・メドウズ他『成長の限界——ローマ・クラブ「人類の危機」レポート』大来佐武郎監訳（ダイヤモンド社、1972年）。高度経済成長批判については以下参照。朝日新聞経済部編『くたばれGNP——高度経済成長の内幕』（朝日新聞社、1971年）。

56 花森「君もおまえも聞いてくれ」、17頁。

57 現在は隔月刊で、澤田康彦が編集長を務めている。

三脚で『暮しの手帖』をつくりあげた社主の大橋鎮子は、2013年に亡くなった。

8. むすびにかえて——いま花森安治を読むこと

これまでの議論から明らかなように、花森安治は「日常性」がもつ政治社会的なダイナミズムに焦点をあてて、文化政治の問題に独自のアプローチから実践的に取り組んだ知識人として評価することができる。その思想と行動は、たんに狭義の「文化運動」とどまらず、文化政治の言説空間を切り開く民主主義政治思想の実践として読むことができる。この点において、花森は戦後日本思想史でも特徴ある思想家のひとりにちがいない。花森は、「暮らし」と名づけられた人びとの日常生活が政治社会の権力作用の重要なアリーナであることにこだわりつづけた。言いかえると、彼は生きることそのものが政治を構成していることを理解し、雑誌『暮しの手帖』という運動体を介して政治的・社会的主体性構築の問題に取り組んでいたといえる。

1960年代後半以降の花森は、同時代へのつよい危機感と背景として、戦争と政治、公害の問題に正面から向き合うようになり、政治経済体制への直截な批判をつよめていった。しかしその批判は、危機感の深化とともに次第にペシミスティックな色彩が濃くなった。花森は戦後の高度経済成長期に進展する大衆消費社会のなかで活躍したと同時に、日本社会と人びとの意識が保守化し、政治的無関心が広がっていくことにたいしては警告を発しつづけて、現代の政治的・社会的無関心を花森は「うじゃじゃけた」態度、「チョンマゲ根性」として批判したのだった。

興味深いことに、とりわけ1970年代にかけての花森の国家・大企業批判は、2011年の東京電力福島第一原子力発電所事故発生以来の日本社会を念頭において読むとき、立法府・行政・企業の法・政治的・社会的責任、マスメディアの権力からの独立など、さまざまな、そして重要な示唆をみいだすことができる。その意味で、花森の暮らしの概念が日常生活から生命の問題へと拡大・変容していった1970年前後の時期を、「プレ2011年」とでもよぶべき歴史的重要性をもつ時代として（再）評価する道筋がみえてくるように思われる。事実、1974年には田中角栄内閣のもとで電源三法（電源開発促進税法、特別会計法、発電用施設周辺地域整備法）が制定され、以後の原子力政策推進の基礎が整備されたのだった。暮らしといのちをつなげて戦争と国家、公害をひとつの問題として捉えた1970年の花森の思考のその先に、原発・核災害がおぼろげに姿をあらわしていたのではないか。また、花森は食べる

ことの政治性を意識し、添加物をはじめ食品の安全性に最大限の注意をうながしていた。そしてマクロな視点では、食べることを語ることで生きることが語り、商品を批評することで文化や社会の変革に働きかけようとしていた。新たな核災害をつうじて、2010年代の今日ほど、食べることと生きること、食べることそのものが政治であることを意識せざるをえない時代はない。その意味で、人びとの日常生活と環境をめぐる1970年代の政治とその歴史性に注目しつつ花森を読みなおすことは、現代日本の政治・社会・文化を考察するうえで示唆を与えるものといえる。

いま花森を読むことは、戦後日本の文化政治において日常性をめぐる文化のカテゴリーがどのような権力関係の網の目のなかで機能してきたのかを問いなおすことであるはずだ。日常性への視座を発展的に引き継ぎつつ新たな文化政治の場を切り開くにはどのような回路があるのか。そうした視座からの読みを可能にしてくれる参照点として、花森安治のテキストは政治学と文化研究の興味ぶかい接合面を形成している。

※ 本稿の草稿は2014年2月11日にカリフォルニア大学ロサンゼルス校で行われた招待講演 (Hanamori Yasuji and the Politics of Everyday Life in Postwar Democracy) において報告された。貴重な機会を与えてくださったProf. Katsuya Hiranoに感謝したい。

【参考文献】

《花森安治》

『暮らしの手帖』（暮らしの手帖社、1948年-）（22号までの雑誌名は『美しい暮らしの手帖』）。

暮らしの手帖編『保存版 戦争中の暮らしの記録』（暮らしの手帖社、1969年）。

花森安治『一銭五厘の旗』（暮らしの手帖社、1971年）。

花森「わが思索わが風土」、『朝日新聞』1972年6月17日。

『文藝別冊 花森安治——美しい「暮らし」の創始者』（河出書房新社、2011年）。

『花森安治集——いくさ・台所・まつりごと篇』（LLPブックエンド、2013年）。

図録『花森安治の仕事——デザインする手、編集長の眼』（読売新聞社・美術館連絡協議会、2017年）。

《その他》（ABC順）

秋山洋子『「暮らしの手帖」を読みなおす——花森安治と松田道雄の女性解放、加納実紀代責任編集「リブという「革命」——近代の闇をひらく』（インパクト出版会、2003年）。

天野正子『「生活者」とはだれか——自律的市民像の系譜』（中公新書、1996年）。

- 朝日新聞経済部編『くたばれGNP——高度経済成長の内幕』（朝日新聞社、1971年）。
- 馬場マコト『戦争と広告』（白水社、2010年）。
- 馬場マコト『花森安治の青春』（白水社、2011年）。
- Judith Butler, *Frames of War: When is Life Grievable?* (Verso, 2010). [ジュディス・バトラー『戦争の枠組——生はいつ嘆きうるものであるのか』清水晶子訳（筑摩書房、2012年）]。
- Harry Harootunian, *Overcome by Modernity* (Princeton University Press, 2002). [ハリヤー・ハルトゥーニアン『近代による超克』上下、梅森直之訳（岩波書店、2007年）]。
- 鹿野政直『日本の近代思想』（岩波新書、2002年）。
- 葛西弘隆「丸山真男の『日本』」、酒井直樹・ブレット・ド・バリー・伊豫谷登士翁編『ナショナルリティの脱構築』（柏書房、1996年）。
- 葛西弘隆「ナショナル・デモクラシーと主体性——丸山真男の民主主義論再考」、『思想』1999年2月号。
- 葛西弘隆「花森安治と北海道——開拓・棄民・国家」、『国際関係学研究』第44号（津田塾大学、2018年）。
- J. Victor Koschmann, *Revolution and Subjectivity in Postwar Japan* (University of Chicago Press, 1996). [J. ヴィクター・コシュマン『戦後日本の民主主義革命と主体性』拙訳（平凡社、2011年）]。
- ジョン・ロック『統治二論』完訳、加藤節訳（岩波文庫、2010年）。
- 丸山眞男「政治と台所の直結について——それが何であるか、又それが何でないか」、『丸山眞男集』第16巻（岩波書店、2004年）。
- ドネラ・H・メドウズ他『成長の限界——ローマ・クラブ「人類の危機」レポート』大来佐武郎監訳（ダイヤモンド社、1972年）。
- 三木清「新宣伝論」、『三木清全集』第15巻（岩波書店、1967年）。
- 大橋鎮子『「暮しの手帖」とわたし』（暮しの手帖社、2010年）。
- 酒井寛『花森安治の仕事』（暮しの手帖社、2011年）。
- 酒井直樹『日本思想という問題——翻訳と主体』（岩波書店、1997年）。
- 桜井哲夫『増補 可能性としての「戦後」——日本人は廢墟からどのように「自由」を追求したか』（平凡社ライブラリー、2007年、原著、講談社、1994年）。
- 佐藤千寿子「花森安治—その時、何を着ていたか?」、栗原彬、吉見俊哉編『敗戦と占領——1940年代』、『ひとびとの精神史』第1巻（岩波書店、2015年）。
- 佐藤卓己『大衆宣伝の神話——マルクスからヒトラーへのメディア史』（弘文堂、1992年）。
- 佐藤卓己、馬場マコト「花森安治の書かなかったこと」、『考える人』2011年夏号（新潮社）。
- 高島通敏編『日常の思想』、『戦後日本思想体系』14（筑摩書房、1970年）。
- 戸坂潤『日常性について』1934年9月、『戸坂潤全集』第4巻（勁草書房、1966年）。
- 津野海太郎『花森安治伝』（講談社、2013年）。